

# 小西加保留先生ご退職に寄せて

## －先生との思い出を振り返る－

2016年度人間福祉研究科博士課程前期課程修了生 宇野剛司

### 1. はじめに

大学から「小西先生が今年度で退職するにあたり、原稿を書いてほしい」と依頼を頂いた時、まず思ったのは、他にも先生のことをよく知る卒業生のOB・OGがたくさんいらっしゃる中で、「なぜ自分に？」という驚きと疑問であった。そこで、私がソーシャルワーカーとしての歩みを始めてから今日に至るまでのことについて思いを巡らせてみた。思い返せば、私と先生との付き合いは、私が大学3回生の時に先生のゼミに所属したことから始まり、大学を卒業し、一度社会に出た後、再び大学院でお世話になった期間を合わせると、約10年近くになる。今回お声かけを頂いたことで、私のソーシャルワーカー人生には「常に先生の姿がある」ということに改めて気づかされ、感慨深い気持ちになった。そして、このように先生との思い出を自分なりに形にする機会を与えていただくことができた事に感謝し、卒業生を代表して筆を取らせて頂く事とした。「もう先生が関学を去ってしまわれるのか」と思うと、母校に当たり前のよう存在していた「ともしび」が1つ消えてしまうような寂しさが込み上げてくる。先生は昔からバイタリティにあふれ、いつまでもお変わりがないので、そんなにも年月が経っていたことに驚かされる。

私のソーシャルワーカーとしての原点は、まぎれもなく関学での学びであり、小西先生の存在がいつもそこにあった。小西先生と出会っていなければ医療ソーシャルワーカー（以下、MSW）としての人生を歩んでいなかったといっても過言ではない。あまり文才はなく稚拙な表現で、私的見解を多分に含んだ内容になるが、筆を任された以上、先生との思い出を率直な言葉で綴らせて頂きたいと思う。

### 2. 先生との出逢いー私のソーシャルワーカーとしての原点ー

大学進学までに祖母をがんで、また叔母2人を脳腫瘍・白血病で亡くしていた私にとって、医療とのつながりはさほど遠いものではなかった。人の生死や残された家族の人生について考える機会も多かったため、「人の支えになる仕事がしたい」と考えるようになった。しかし、その時点で（大変お恥ずかしい話なのだが）私はソーシャルワーカーという存在を知らなかった。そのため、医療・介護・心理・福祉など、いくつかある候補のひとつとして、縁のあった当時の社会学部社会福祉学科（現：人間福祉学部社会福祉学科）に入学し学びを深め、その中でソーシャルワーカーの存在と専門性について知った。実は大学に進学してからしばらくは、その後の進路として「ソーシャルワーカーになる」とは具体的に考えていなかった。社会福祉士の国家資格を取得できるメリットがあるからと、卒業に必要な単位をすべて資格関連のものにした、くらいの認識であったように思う（先生ごめんなさい）。そんな私が医療ソーシャルワーカーを志すようになったきっかけを与えてくださったのは、まさしく小西先生だった。

大学2年の秋学期頃は、「どのゼミを選ぶか」が学生の間での持ちきりの話題であった。私は前述したように医療への興味・関心があったため「医療もソーシャルワークも学べる」という単純な動機から小西ゼミを選んだ。ゼミは16名と大所帯ではあったが、それぞれの興味・関心に合わせて研究発表を行った。ゲストスピーカーをお招き下さり当事者の方から直接学ぶ機会を与えて頂いた。アルコール依存症の当事者団体を招待して下さった際には、疾病を患いながら生活することの苦悩や葛藤、また中でも生きることの素晴らしさを当事者の方々の語りから伺い、それまで何も知らずに生活してきた学生の私であったが、我々の暮らしの中に様々な葛藤や苦悩を抱えて生活をしている方々がいること、それに気づ

くことが出来ない自分や社会であることに気付かされ、「もっと様々な困難を抱えている方の支えになりたい」と問題意識を持つようになった。先生が与えて下さったこの出逢いは、私の中の価値観に変容をもたらし、私はソーシャルワーカーという仕事に深く関心を持つようになっていった。

そういった学びの機会を与えていただきソーシャルワークについての魅力を知っていく中で、自分がソーシャルワーカーを目指す大きな転機となったのは「社会福祉援助技術現場実習」である。(今でも続いているのかもしれないが、) 当時は領域ごとに設定された試験を突破しなければ病院実習を受けることが出来なかった。医療領域では医療制度的な知識が問われ、当時の私には難問であったが、先生の丁寧なご指導のおかげで何とか突破することが出来た。3回生の春学期に行われた実習指導は竹内路子先生が主となり行われたが、小西先生からもサポートティブにアドバイスを頂きながら、事前学習や実習の心得についてご教授頂いたように記憶している。社会福祉の現場に出たことのない私にとって、蓄積された豊富な実践経験を持つ先生方の講義は実に価値のあるものであり、実習に臨む軸となった。当時は社会福祉の実習に医療機関が追加されて間もない頃で、実習先確保にも大変なご尽力があったのではないかと、実習生を受け入れる立場となり改めて思う。また、私は部活動との両立を目指して実習期間中だけ大学近辺に下宿していたこともあり、実習先のマッチングについても非常にご迷惑をおかけしたのではないかとと思っている。学生の個別性に配慮し、実習先のコーディネートを下下さった小西先生や実習指導のスタッフの方々に、この場をお借りしてお詫びと感謝を申し上げたい。

実際の現場実習では、小西先生をはじめとする先生方から教わった知識・技術・価値と実践がつながる感覚を覚えたことを今でも鮮明に記憶している。私が特に印象に残っているのは独居高齢者の看取りの場面に立ち会わせていただけたときのことであった。詳細については個人情報の兼ね合いもあり本稿では割愛させていただくが、医療機関で見る「患者」の枠を超えた「生活者」としてクライアントを見ることの大切さを学んだ。たとえ看取りの場面であろうとも、その先クライアントがどのような最期を迎えるのか、またそこにソーシャルワーカーとしてどのような支援ができるのかをスーパーバイザーとともに考えた。その時に「クライアントの人生に寄り添うことのできるソーシャルワーカーになりたい」と具体的にMSWを目指すようになった。小西先生をはじめとする先生方からのご指導がなければ私はMSWになっていなかったかもしれない。貴重な学びの機会を与えてくださった先生には、本当に感謝してもきれない思いである。

また、そういった動機付けから4回生の医療福祉実習にも参加する予定としていたが、その年の5月に私は肺結核を患ってしまった。幸い入院はせず済んだが、外来で半年間治療が必要であったこと、薬剤耐性ができると薬が効かなくなるため内服治療は毎日継続して続けなければならないこと、発熱が継続していたこと、実習先までの通学時間の問題などから実習を中止にさせていただき決断をした。この時も先生は、実習先のスーパーバイザーの方と密に連絡を取り何とか実習を継続できないかと交渉して下さった。非常にご迷惑をおかけしたと今でも申し訳ない気持ちでいっぱいである。そして、医療福祉実習には参加できなかったが、多方面に調整をして下さり、実習指導の授業への参加を許して下さいました。この計らいにより私は実習に行っている同期からたくさん刺激を与えてもらい、また先生からの指導を通してより一層「MSWになりたい」とモチベーションを高めることが出来たと思っている。

また、卒業論文について、きめ細かく指導して頂いたことを今でも覚えている。私は薬害肝炎訴訟問題をテーマに卒業論文を書いていたが、論文というものを書いたことのない私に、方法論の指導から文献情報、また当事者の方の基調講演の情報などを提供して下さった。先生のご助言のおかげで拙稿ではあるが何とか論文を提出できたと思っている。先生は学生一人ひとりに懇切丁寧に、学生が納得いくまでとことん一緒に考え、導いて下さった。先生の豊富な知識とネットワークで、非常に多くのことを学ばせていただけたと思っている。今思えば、先生はその時期に博士論文の執筆をしておられるはずで、非常にご多忙であったにもかかわらず、学生一人ひとりのやりたいことにとことん向き合い、アドバイスを与えて下さっていた。

### 3. 現場経験から大学院進学へ

2009年4月に学部を卒業した後、私は地元の病院へ晴れてMSWとして就職することが出来た。当時働いていた職場は急性期病院で、救急医療を担う地域の中核病院としてその機能を有していた。医療機関に勤めてまず感じたのは、大学で学んできたソーシャルワーク実践・個別支援が、実際の医療現場では制度・政策や組織のしがらみによって十分にできないことへの葛藤である。これは医療領域だけに限られたことではないかと思われるが、私には非常にショックな出来事であった。医療スタッフにソーシャルワークの視点が理解されないこともよくある話であるが、患者の意思決定に費やす時間的猶予がない状況に危機感すら覚えたものである。「チーム医療」という言葉が定着しつつあった時代に、他職種との連携やクライアントの権利擁護をどう考えていけばよいか頭を悩ますことが多くなっていった。医療モデルがその価値の大半を占める医療機関において、生活モデルを基盤とするソーシャルワークの視点は非常に重要であるにも関わらず、なかなか発展していかない現状があった。

このような状況が続きMSWとして葛藤していた時、大学時代の同期から「小西先生があと数年で定年退職になられる」との情報が入った。その時、私にとって唯一無二の存在である先生が退職されることへのなんとも言えぬ寂しさを覚えたと同時に、「先生から学びを得ることができる機会は今しかない…先生の元でもう一度学びなおしたい！」という強い気持ちが湧き上がった。現状を何とかしたいと思っていた私にとって、その成果を共有するのであれば、私をMSWに導いて下さった小西先生しか居ないと、真っ先に先生の顔が浮かんだ。この時、自分の中の小西先生の存在の大きさを改めて実感した。

それまで「現場が忙しい」ということを言い訳にしてろくに連絡も取っていなかったにも関わらず、先生は私の悩みや進学についてじっくりと話を聴いて下さり、二つ返事で大学院での指導について快諾頂いた。大学卒業から5年以上が過ぎていたが、先生のパワフルさは変わらずご健在であった。先生の心温まるお言葉と笑顔に、息子が実家の母親に迎え入れられたような言いようなない安心感に包まれた感覚になったことを覚えている。2014年の初夏のことであった。

大学院入試の計画書についても懇切丁寧に指導をして頂き、そのおかげで何とか入試をパスすることが出来た。合格発表当日、私が大学で合格通知を見る前に先生からメールが入っていた時には驚いたが、早く合格していることを伝えてあげたいと思う先生の温かさを感じたことを覚えている（おそらく入試当日の口頭試問でうまく答えることが出来ず、先生にメールで弱音を吐いたことを気にしてくださっていたのではないかと思う）。

大学院進学後、修士論文作成に向けて先生との議論が続いた。現場での葛藤や思いを研究という形に落とし込むためにどのような構成を考えるか。研究について無知な私にとって、小西先生は「現場と学問を結ぶ架け橋」のような存在であった。また、議論の中で、医療ソーシャルワークの現状と課題について未熟ながら現場経験を重ねたことで先生と同じ土俵で語り合うことができ、内心とても嬉しかった。現場を知っている先生だからこそ、現場のMSWの葛藤や苦悩を共有していただけたのだと思う。長年HIVソーシャルワークについて現場実践と研究を続けてこられた先生のアドバイスは非常に濃密なもので、現場の視点をいかに研究として示していくかについて多くのことを学ばせて頂いた。途中、研究テーマを大幅に変更するということがあったが、私の研究に対する悩みにも真摯に向き合ってくれ、まさに「ソーシャルワーク」して頂いたような感覚になったことを今でも鮮明に覚えている。

修士課程2年生に進学した頃には、週1回の研究演習だけではなく適宜指導の機会を頂くなど、お忙しい中本当に多くの時間を割いていただいた。私は質的研究に取り組んでいたため、研究対象者の選定についても、先生のネットワークを活かしてお声掛けを頂いたことで実現した。また概念抽出などについても先生と非常に多くの議論を交わした。おそらく質的データを概念図としてまとめる作業だけでも数か月の時間を費やしたが、その間、真摯に私の研究に対する悩みにも向き合ってくれアドバイスを受けた。先生の励ましやアドバイスのおかげで、拙稿ではあるものの何とか論文の形に仕上げることが出来たと思っ

ている。私の修士論文は小西先生との共作であると言っても決して過言ではない。そのおかげで優秀論文賞という名誉ある賞まで頂くことが出来た。先生には感謝してもしきれない気持ちである。

実は大学院修了後の進路についても、小西先生に大変尽力を頂いた。現在 MSW として現場復帰しているが、私の悩みに相談に乗って下さるなかで、先生のネットワークを活かしてソーシャルワーク実践に精通している医療機関を紹介して頂いた。今働いているその現場で、ソーシャルワーカーらしい実践を行うことができおり、そのようなご縁を与えてくださった先生に改めて感謝申し上げたい。

大学院を卒業し、現場に入ってから先生との交流は続いている。先日も、第27回日本医療社会福祉学会の全国大会が東京で行われたが、先生からお声掛け頂き、分科会での発表の機会を与えて頂いた。大学院での成果を MSW の皆さんと共有する機会を与えていただき、身の引き締まる思いであると同時に、現場実践を研究成果として世に発信していく重要性を学んだ。また、大学院時代によくお名前を聴いていたゼミの先輩にもその時に顔合わせをさせていただくことができた。先生を通して尊敬できる諸先輩方との出逢いが拡がり、接点を持たせて頂くことができ、感謝の思いを新たにしたい。

#### 4. 終わりに

以上、小西先生との出逢いから現在に至るまで、私の主観による思い出を振り返ってみた。私から見た小西先生は、いつも忙しく、しかしながらどの学生にも分け隔てなく真摯に耳を傾けて下さり、道を開いてくださる存在であった。私は小西先生と出逢っていなければ MSW にはなっていなかったし、大学院に進学することも、今こうして新たな現場で実践をすることもしていなかったかもしれない。それほど私にとって小西先生は偉大な存在である。私の MSW 人生の中に、常に先生の存在があり、側面的にサポートして頂いていることを、本稿を書き上げる中で改めて感じる事が出来た。

先生は大学病院で医療ソーシャルワーカーとして勤務されている頃から、HIV ソーシャルワーク、アドボカシーの研究を続けておられる。現場に居られた時からクライアントの権利を守り、実践を研究という形で世間に問う先生の姿勢は見習うことが非常に多く、常に私の目標である。先生は、これまでの MSW 実践には領域ごとに「奥深いノウハウの蓄積がある（小西、2016; 51）」ことを述べたうえで、古くから生活モデルを取り入れた SW がイメージする生活支援への取り組みを「より戦略的に、より意図的に可視化の視点を持って発信し、アクションを起こすことを『今』しなければ、社会福祉専門職の潜在能力は潜在したままになってしまう（小西、2016: 50）」とし、医療領域においてソーシャルワークの専門性を発信する意義について指摘しておられる。私も現場経験者であり、未熟ながらも研究者の卵として、現場と研究の両輪でもって医療ソーシャルワークの重要性を世に示すことの出来る、小西先生のような存在になりたいと思っている。今でも全国至る所を飛び回っておられる先生のお姿や噂を聴くと、「自分も負けてはいられない」と身の引き締まる思いになる。

先生が関西学院大学を去っていかれることは非常に残念であるし、非常に大きな存在を失ったような気持ちである。しかし、先生はいつまでも私にとっては「師」であり MSW の大先輩である。退職後も引き続き、末永く私たちを見守って下さると幸いである。もっともっと先生から様々なことを学びたい。現場の立場から、先生と今後も引き続きコラボレーションが出来ればうれしいと考えている。

長い間、本当に私を支えて下さり、ありがとうございました。これからも、引き続きどうぞよろしくお願い致します。ご自身のお体についても体調に気を付け、ご自愛ください。

#### 参考文献

小西加保留 (2016) 「社会福祉と保健医療の関係性の変遷と展望」『社会福祉研究』第125号, 44-52